

巻頭言

Dainiがめざすイノベーション人材育成
～STEAM×ICE～

熊本県立第二高等学校長

光永 幸生

本校のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業は、第4期の5年目を迎えました。一昨年度、文部科学省から第4期の中間評価を受け、昨年7月に「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成が可能と判断される。」との評価をいただきました。今年度、第4期の最終年となり、更に先導的役割のSSH校に学校自体が変容するためにはどうすればいいのか、検討を重ねて参りました。また、コロナ禍で制限などが課される中で様々な事業を取り組んで参りました。本書は、中間評価やこれまでの研究開発過程で気付いた課題を踏まえ、更なる飛躍を目指す本校のSSH事業の内容をまとめたものです。ここに掲載された内容が、二高ICEモデルルーブリック評価の如く、次のスパイラルへの指針となるでしょう。

さて、この第4期を振り返りますと、「二高ICEモデル」による探究活動評価の確立、全ての授業における「探究型授業の導入」と「Eフェーズの評価の高まり」、理数科と美術科の連携から普通科への普及による「全校展開」等、皆様の御指導のもと、大きな成果を取めることができました。長年本校は、このSSH事業において授業開発や、高度に進化したSTEAM教育とは何かということを追求めて参りました。そして、第4期の最終年を迎え、徐々にそのゴールが見えて参りました。それがイノベーション人材の育成システムの構築とその自走化であると考えています。

本校ではイノベーション人材を次の3つの資質・能力を備えた人材と定義しました。

- ① 科学者に必要な哲学的思考や倫理観を兼ね備えた高度な科学的探究力
- ② 独創性と創造性に富んだ課題発見能力
- ③ 変化する社会に対応する応用力

このような人材を育てるため、今後更に高度化したSTEAM教育を展開して参りたいと考えています。また、科学人材育成システム構築のステップとして、昨年9月、本県SSH5校で熊本サイエンスコンソーシアム（KSC）を発足することができました。参加に御協力いただきました本県SSH校の校長先生はじめ、担当の先生方には深く感謝申し上げます。更に12月には崇城大学とKSCとで高大接続連携協定を結ぶことができました。今後、大学との連携研究の推進と卒業生の追跡調査による評価探究や、大学入試制度や単位互換制度まで踏み込んだ高大接続研究が全国に先駆けて前進することを期待しております。また、このことを他の大学の皆様とも共有するとともに、KSC参加校についても拡大の方向で進めて参りたいと考えております。

この4月から、高校でも新学習指導要領が始まります。探究的学習活動を一層深めていくことが求められると同時に、その評価のあり方が大きな課題となります。本校では観点別学習評価にICE評価モデルを活用するとともに、主体的な学びを、特色ある理数科、美術科、普通科3学科の連携により、一層推進して参りたいと考えています。全ての学びには感動がなければなりません。本校は学びの楽しさ溢れるSSH校を目指して日々精進して参ります。

最後になりましたが、日頃から御支援御指導を賜っています文部科学省、科学技術振興機構、本校の運営指導委員、熊本県教育委員会の皆様、及び各関係諸機関の皆様へ深く感謝申し上げます。巻頭のごあいさつといたします。

